讃岐国分寺本堂の昭和修理

THE RESTORATION OF KOKUBUN-JI MAIN HALL, KAGAWA PREFECTURE, IN THE SHOWA ERA

三浦 要一*

Yoichi MIURA

The main hall of Kokubun-ji in Takamatsu City, built in the Late Kamakura Period, was designated as a national treasure under the Ancient Shrines and Temples Preservation Act. During repairing undertaken in the Showa Era (1941–1943), change of the building's original form was permitted. This paper discusses restoration that aimed to return the building to its original form, clarifying that the pitch of the roof after the remodeling was representative of the Edo Period, and was different from the original. It is also clear that the *syumidan* and *zushi* were made in the Kanbun Era.

Keywords : *National Treasures Preservation Act, Restoration of Historical Buildings, Change of original form, Report on restoration work, List of drawings, Main hall of Kokubun-ji*
国宝保存法, 文化財修理, 現状変更, 修理工事報告書, 保存図, 国分寺本堂

はじめに

讃岐国分寺は高松市国分寺町国分に所在し、古義真言宗御室派に属する寺院であり、白牛山千手院と号する。四国 88 か所霊場の第 80 番札所にあたり、昭和 27 年には讃岐国分寺跡として国の特別史跡に指定されている¹⁾。本堂は明治 37 年(1904) 8 月 29 日の「内務省告示第五十七號」に「特別保護建造物ノ資格アルモノ」と定められた²⁾。構造形式は桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、本瓦葺である。『資料旧国宝建造物指定説明』には、

天平九年讃岐ノ国分寺トシテ草創セラレシ者ニシテ、寺伝行基ノ開基ト称ス、再興年代明カナラサレトモ、鎌倉中期ノ者ナルカ如ク、向拝、厨子、天井等多少後補ノ者アレトモ、様式手法頗美ニシテ当時代ノ優作タルヲ失ハス

と掲載されている³⁾。建立年代は明らかではないが、建築様式から鎌倉中期とみなされ、向拝、厨子、天井などが後補であることが知られている。建立年代については、『国宝・重要文化財建造物目録』に鎌倉後期(1275～1332)とある⁴⁾。指定後の主な修理には現状変更が掲げられるが、報告書は未刊行となっている。解体修理は昭和 15 年度から昭和 17 年度にかけて実施され、主任技術者は竹口富太郎が担当し、総事業費が 67,665 円であった⁵⁾。

『国宝・重要文化財大全』には「内部に改造あり」と併記され⁶⁾、「須弥壇と天井まで達する大きな厨子は江戸時代の改造によるもの」という指摘がある⁷⁾。さらに「内陣天井や屋根妻飾りは近世の改作になるもので、屋根勾配なども当初とは異なるらしい」⁸⁾「江戸時代に幾度かの修理が行われ、屋根の形式(とくに屋根勾配)は中世とは異なっている」⁹⁾とある。建立年代は鎌倉後期であっても、屋根勾配が当初とは異なっている。屋根の形態に関する現状変更では向

拝を撤去し、復原の措置が講じられた¹⁰⁾。須弥壇と厨子は江戸時代の改造によるもので、内陣天井と妻飾も近世の改作とみられている。

明治 30 年の古社寺保存法の制定後は、解体修理がおこなわれ、部材に刻まれた修理の痕跡が克明に調査され、創建以来の修理や増改築の履歴が検討されるようになった。昭和 4 年公布の国宝保存法では、現状の変更について主務大臣である文部大臣の許可を要することになった。ところが竣工後に部材が取り替えられて痕跡が残されない場合は、それ自体を検証することが困難となっている¹¹⁾。

本研究は近代の文化財修理に着目して修理の方針やその内容を明らかにし、建立当初の建築様式、修理や増改築の履歴について検討を加える一連の研究である¹²⁾。讃岐国分寺本堂の昭和修理では破損状況や痕跡を調査し、修理や改造の履歴が明らかとなり、その成果にもとづいて現状変更が許可されていたものと考えられる。ところが報告書は未刊行であり、その詳細は明らかになっていない。昭和修理をとりあげる重要な意義がここに存するが、これまで昭和修理の解明が遅れていた原因のひとつは、資料上の制約であった。

本論が基礎資料とする松浦正一文庫の「國寶建造物國分寺本堂維持修理報告書」(以下「報告書」と略記する)と題する原稿は、「香川県史編纂原稿用紙」に手書きで謄写され、最後に「昭和十九年十二月八日竹口富太郎氏蔵原稿ヨリ謄写 奥村」と記されている¹³⁾。「報告書」は 11 の章からなり、「國寶建造物國分寺本堂維持修理実施設計書」という端書を持ち、「工事ノ概要ヲ示スモノ」詳細ハ実施ニ當リ慎重調査研究ノ上遺漏ナク遂行セルモノ」とある。「報告書」は昭和修理において主任技術者を担当した竹口富太郎が私蔵した原稿を、昭和 19 年 12 月 8 日に謄写したものであった。「報告書」は謄本ではあるが、その資料的価値は高いと判断することができる。

* 高知県立大学文化学部文化学科 准教授・博士(学術)

Assoc. Prof., Dept. of Cultural Studies, Faculty of Cultural Studies, University of Kochi, Ph. D.

表 1 讃岐国分寺本堂の昭和修理の経過

年月日	事 項	関係者
昭和13年	9月5日	大暴風雨により屋根の一部が破損
	10月5日	國寶修理ニ関シ實地御調査願
	10月7日	國寶建造物修理ニ關スル件
昭和14年	10月24～27日	上田虎介技師の実地調査
	10月	「香川縣 國分寺本堂維持修理設計書 昭和十四年十月調査」
昭和15年	5月9日	國寶建造物維持修理ニ關スル件
昭和16年	2月10日	解体修理工事が起工
	8月20日	技術官派遣願
	8月29日	技術官派遣ノ件
	10月10日	「復命書」國分寺本堂現状変更調査
	10月13日	現状変更願
		國寶建造物修理ニ關スル件
	11月21日	国宝保存会で現状変更が許可
	12月1日	國寶建造物現状変更ノ件依命通牒
	12月19日	設計変更及補助金増額願
	12月24日	國寶建造物國分寺本堂修理ニ關スル件
	12月	「香川縣 國分寺本堂維持修理設計変更書 昭和十六年十二月調査」
昭和18年	8月31日	解体修理工事が完成

出典：「國分寺本堂修理工事精算書1件書類」と題する書類綴り（大岡實博士文庫）

昭和修理は比較的详细にあとづけることが可能となった¹⁴⁾。

本論は讃岐国分寺本堂の文献資料を可能な限り網羅し、昭和修理について考察を加えることが目的である。最初に昭和修理の経過と現状変更の要旨を明らかにし、つぎに痕跡調査において解明されていた増改築を検討し、最後に現状変更について考察を加える。

1. 昭和修理の概要

大岡實博士文庫には、「國分寺本堂修理工事精算書1件書類」と題する書類の綴りがある¹⁵⁾。この書類の綴りは、昭和修理の経過、起工後に現状変更が許可されていたことを明らかにする（表1）。

（1）昭和修理の経過

昭和13年10月5日付の「國寶修理ニ関シ實地御調査願」は、國分寺住職ほか3名から文部大臣宛に申請された。この申請をうけて昭和13年10月7日付の「國寶建造物修理ニ關スル件」を、香川県知事が文部省宗教局長宛に提出した。実地調査願は、「昭和十三年九月五日ノ大暴風雨ニ依リ屋根一部破損致シ」とあり、昭和13年9月5日の大暴風雨により、本堂の屋根の一部が破損した。

『さめき国分寺町誌』は、香川新報の昭和14年10月29日付の記事を引用し、「本省上田技師の調査終る」「十二間四方の此の本堂を先づ解体其筋の権威者をして再組立をほどこし建築當時其まゝの姿を止どめる事になつた」「總復舊費凡五萬圓と概算」とあり¹⁶⁾、上田虎介技師は屋根が破損した本堂の現地調査を担当していた。

昭和15年5月9日起案の文部省宗教局長から香川県知事に宛てた「國寶建造物維持修理ニ關スル件」には、「客年十月二十四日ヨリ四日間本省囑託上田虎介ヲ派遣致シタル處右修理設計書調製致シタルニ付」とあり、上田虎介が作成したと考えられる「香川縣 國分寺本堂維持修理設計書 昭和十四年十月調査」が添付されていた。

（2）現状変更の許可

昭和16年8月20日付の「技術官派遣願」は、國分寺住職ほか3名から文部大臣宛に提出された。この派遣願をうけて昭和16年8月29日付の「技術官派遣ノ件」を、香川県学務部長が文部省宗教局保存課長宛に提出した。派遣願は「解体調査中ニ有之候本建造物

ハ後世大規模ナル改造ヲ加ヘタル痕跡ヲ發見シタル」とあり、解体調査中に後世の改造の痕跡が発見されたことを記している。昭和16年10月10日付の「復命書」は、伊藤久技手が出張調査の結果を、文部大臣宛に「國分寺本堂現状変更調査」として報告した。

昭和16年10月13日付の「現状変更願」が、國分寺住職ほか3名から文部大臣宛に提出された。この変更願をうけて同日付で「國寶建造物修理ニ關スル件」を、香川県知事が文部省宗教局長宛に提出した。昭和16年12月1日起案の文部省宗教局長から香川県知事に宛てた「國寶建造物現状変更ノ件依命通牒」には、昭和16年11月21日開催の国宝保存会で許可された現状変更が布達され、現状変更の要旨が判明する。

昭和16年12月19日付の「設計変更及補助金増額願」は、國分寺住職ほか3名から文部大臣宛に提出された。この増額願をうけて昭和16年12月24日付の「國寶建造物國分寺本堂修理ニ關スル件」を、香川県知事が文部省宗教局長宛に提出した。この書類には、「香川縣 國分寺本堂維持修理設計変更書 昭和十六年十二月調査」が添付されている。

以上の解体修理は「報告書」の「八．修理経過」によると、昭和16年2月10日に起工し、昭和18年8月31日に完成した。当初は昭和18年7月31日までに完成の予定であったが、「大東亜戦ニ遭遇シ資材統制益々強化サレ勞力又佛底シ」「農村ノ為メ農繁期ニハ工事ハ中止状態トナリ」とあって、延期された事情が明らかとなる。

2. 昭和修理にみる建物沿革

讃岐国分寺は天平13年（741）に聖武天皇の詔勅によって創立されたが、室町末期にいたる沿革が明らかでない。本堂は鎌倉後期に西大寺流律衆が再興し、奈良時代の講堂の位置に建てられ、その際に礎石が動かされているものと考えられている¹⁷⁾。

（1）基礎調査にみる床下地盤と礎石

「報告書」の「五．各部ノ調査」には、土間が三和叩きのものでもなく、敷瓦が張り詰められた形跡も発見されなかったとある。縦横幅1尺5寸の布掘りをおこなうと、1尺2～3寸の深さに平坦で堅固な地盤があった。これは外部の地盤面へ天平時代の講堂あるいは現本堂の建立にあたって盛土されたものと考えられた。

痕跡については「側廻り及内部間仕切と同位置に地覆仕口穴を存し、出入口方立の仕口溝が地覆まで延びてゐる」とあり、建立当初は土間式に計画されたが、床張りに改められたものと認められた。

礎石は自然石であり、石質と形状が天平時代の金堂跡の礎石と同一のものであった。礎石の大きさは本堂に比較して大き過ぎるとあり、本堂は「天平時代建立ノ講堂焼失跡ニ幾分規模ヲ改メテ造立サレタモノ」と推定している。昭和修理によって本堂は、規模を改めて天平時代の講堂跡に建てられたとみなしている。

（2）近世以前の讃岐国分寺本堂

昭和修理において再用された文化年間の平瓦には、表面に陰刻された瓦範文字からつぎの銘文が見出され、講堂として建立されたことを伝えている。「報告書」の「三．沿革」には、つぎのようにある。

今本堂者ハ往古ノ講堂也然ニ天正之頃兵ニ依テ回禄其ノ后寛文之頃前大守松平讃岐守英公之諸伽藍悉御造営畢其後御代々之聖主公雖御修造スト大ニ歳移テ無程破損ス又文化十三年頼儀公御造砌焼之也

表 2 讃岐国分寺本堂の昭和修理の現状変更等一覧

現状変更の箇所		改造時期	修理前	竣 工	類例調査
木 工 部	① 側廻り飛貫、 胴貫、足固貫 連子窓 縁側の高さ		各貫穴を後世に一寸彫り上げ、貫 成を高めている	各貫成を減じる（頭貫と同様の 七寸とする）	石手寺（愛媛県）などの同時代 のものを調査研究した
			堅框が柱面へ嵌め込まれる	小脇壁を有する窓に復する	
			足固貫の貫成を高めた際に下げた	元の位置に復する	
	② 側入口		二枚開き戸	楣および藁座を設け、扉の形式 を改める	奈良県の法隆寺上御堂・聖霊 院、室生寺本堂、不退寺本堂、 広島県の浄土寺本堂、明王院本 堂などを比較研究した
	③ 内外陣境装置	寛文12年	上下長押が五間通して取り付く	撤 去	
			中央間棧唐戸、飛貫上彫刻欄間	飛貫、鴨居、敷居を旧位置に設 ける	
			両脇各一間蔀戸、上部吹寄縦格子 欄間、飛貫上彫刻欄間 両端間各一間縦繁棧戸引違、上部 板嵌	五間とも引違格子戸、菱欄間、 上部は壁に改める	
	④ 内陣両側側境	寛文年間	各二間は内法長押、敷居、鴨居を 設け、舞良戸引違とする	長押ならびに建具装置を撤去 し、楣を設けて柱間を開放する	
	⑤ 後陣境	寛文年間	左右一間を板壁（縦板張り）する	板嵌を撤去して柱間を開放し、 楣上の板嵌を真壁に改める	
	⑥ 来迎柱	寛文年間	桁行中央柱間より約二尺広い	柱間と同様の旧位置に復する	
	⑦ 外陣天井		鏡天井	組入天井	
屋 根 の 部	⑧ 内陣天井	寛文年間	棹縁天井	鏡天井、天井高を下げる	
	⑨ 向拝部	寛文9年	向拝一間、唐破風付	撤 去	
			木階段	石 段	
			大棟は箱棟形瓦張りである	大棟は熨斗積みに改める	
	屋根	寛文年間	鬼瓦が新補である	鬼瓦は建造物と同時代のものに 模造する	法隆寺夢殿を模造した

出典：「國寶建造物國分寺本堂維持修理報告書」（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）

天正 10 年（1582）に讃岐へ侵攻した土佐の長宗我部元親の軍勢は、讃岐国分寺を本陣として香西軍と戦った。その兵火に罹って寺内の多くが烏有に帰し、旧講堂であったという現本堂のみが、その難を免れたことを伝えている。

松平家の入国後は、初代頼重が寛文 9 年（1669）に諸伽藍を造営し、文化 13 年（1816）に第八代頼義が本堂の屋根を葺き替えた。それ以外には松平家の入国以前に生駒家の手によって修葺されたこと、享和 3 年（1803）に屋根を葺き替えたことが伝えられる。

（3）昭和修理の発見物にみる修理歴

「報告書」の「十一．発見物」は、昭和修理における発見物を「國分寺天平年代瓦出土ノ説明」「瓦銘文字集」「墨書銘文集」の順に記述している。天正 10 年以前の発見物には、「瓦銘文字集」から文明 10 年（1478）と文明 12 年の年号が明らかとなる。本堂は文明年間の瓦銘をもつ平瓦が使用されていたことになる。旧嵌板の用材は桝であり、昭和修理まで野地板に転用されていたが、胴縁および小穴の跡によって旧嵌板であったことが確認された。8 枚の旧嵌板には永正 10 年（1513）の年号の墨書があり、内陣飛貫に永正年間の墨書が発見されていた。

「瓦銘文字集」は 4 枚の丸瓦、3 枚の平瓦、箱棟堅瓦の銘文字に寛文 9 年の年号がある。「墨書銘文集」をみると、3 枚の嵌板の用材は松板で、内陣天井を寛文年間に高めたところに使用されていた。来迎板壁太鼓張胴貫の 2 箇所には、寛文 9 年の年号の墨書があった。寛文年間の造営は、昭和修理における発見物の瓦銘と墨書から、屋根が葺き替えられ、内部を改造していたと考えられる。

「瓦銘文字集」には文化 13 年の年号が唐草瓦の 1 枚、平瓦の 3 枚、丸瓦の 1 枚、巴瓦の 3 枚を含む 10 枚にあった。これらの瓦銘は、文化年間に屋根葺替工事がおこなわれたことを示している。

昭和修理では寛文年間と文化年間の発見物が確認されており、寛文 9 年の造営から昭和修理が開始された昭和 16 年までの 272 年間

に、根本修理がおこなわれていなかったものと考えられる。

3. 昭和修理の現状変更の要旨

現状変更は昭和 16 年 11 月 13 日に諮問され、11 月 21 日開催の国宝保存会で許可された。変更の要旨は「国分寺本堂修理工事精算書 1 件書類」から判明するが、『清交』（第 19 号）の「國寶建造物現状變更説明 昭和十六年十一月」には、変更の要旨に加えて理由説明が掲載されている¹⁸⁾。現状変更の要旨は、つぎの通りであった。

- 一、側廻り飛貫、胴貫、足固貫の各貫成を減じ、之に伴ひ各連子窓及縁を舊規に復せんとす
- 二、側廻り扉口に楣及藁座を設け、且扉の形式を改めんとす
- 三、内外陣界を舊規に復せんとす
内陣前面五間の後補の間仕切装置即、中央間棧唐戸、飛貫上彫刻欄間
その両脇間各一間蔀戸、上部吹寄縦格子欄間、飛貫上彫刻欄間
両端間各一間縦繁棧戸引違、上部板嵌
各両上下長押附
なるを孰も撤去し、飛貫、鴨居、敷居を舊位置に設け、五間共引違格子戸、菱欄間、上部壁に改めんとす
- 四、内陣両側各二間内法長押附舞良戸引違なるを、長押並に建具装置を撤去し、楣を設け各柱間を開放に爲さんとす
- 五、後陣左右各一間の板嵌を撤去して開放となし、楣上板嵌を壁に改めんとす
- 六、内陣後柱中央二本を舊位置に復せんとす
- 七、外陣鏡天井なるを組入天井に復せんとす
- 八、内陣猿頬天井なるを鏡天井に改め、且高さを低めんとす
- 九、向拝を撤去し、之に伴ひ同所の木階段を石階段に改めんとす

現状変更⑤ 後陣境の各一間は板嵌を撤去し、柱間を開放する。

現状変更⑥ 来迎柱は桁行中央柱間より約二尺広く、柱間を桁行中央柱間と同位置にする。

図1 修理前平面図（出典：『国宝・重要文化財実測図集』）

現状変更⑧ 内陣の猿類天井は、鏡天井に改める。

現状変更⑦ 外陣の鏡天井は、組入天井に改める。

図6 修理前見上図（出典：『国宝・重要文化財実測図集』）

現状変更① 連子窓は小脇壁を有する形式にする。

現状変更⑨ 向拝を撤去し、木階段を石段に改める。

図2 修理前正面図（出典：『国宝・重要文化財実測図集』）

現状変更② 側入口は二枚開き戸であったが、櫛および藁座を設け、棧唐戸の形式に改める。

図3 修理前東側面図（出典：『国宝・重要文化財実測図集』）

現状変更⑧ 内陣天井は斗拱と墓股によって高めているが、天井高を旧位置に下げる。

図4 修理前桁行断面図（出典：『国宝・重要文化財実測図集』）

現状変更④ 内陣両入側境の各二間は内法長押、敷居、鴨居、舞良戸引違を撤去し、櫛を設けて柱間を開放する。

図5 修理前梁行断面図（出典：『国宝・重要文化財実測図集』）

以上、側廻りの飛貫、胴貫、足固貫の各貫成、連子窓、縁側の高さ、扉の形式の変更が許可された。内部は内外陣境装置、内陣兩入側境、後陣境、来迎柱、外陣天井、内陣天井の変更が許可された。向拝は撤去され、木階段を石階段に変更することになった。

4. 昭和修理前と現状変更

(1) 昭和修理の現場事務

「報告書」の「十. 現場事務」は、「今回工事竣成シ実工程表. 実施仕様書並ニ精算書. 寫眞. 実測図. 竣成図. 拓本. 其ノ他必要ノ書類」を文部省へ提出したとある。文部省へ提出した昭和修理に関する書類には写真、実測図、竣成図、拓本が含まれていた。

図面については「平面. 正面. 側面. 縦横断. 見上図ノ実側及竣成各一組」とあり、その他に「詳細. 矩計. 規矩等」の図面が仕上げられていた。奈良文化財研究所は、平面図・正面図・側面図・横断面図・縦断面図・見上図（縮尺 50 分の 1）の 6 枚と詳細図（縮尺 10 分の 1）の 1 枚を保管し¹⁹⁾、7 枚の保存図は修理前の「実測図」であり、文部省へ提出されていた実測図であった²⁰⁾。竣成図である「修理竣工図」は、現存を確認することができない。摺拓本の目録はすでに作成されていたが²¹⁾、写真乾板の目録も刊行された²²⁾。

(2) 現状変更の検証

「報告書」の「五. 各部ノ調査」は、痕跡調査の所見を記述しており、その所見は修理前の「実測図」を参照することで検討を加えることができる（表 2・図 1～図 6）。

「現状変更一」の連子窓については、修理前の小脇壁を確認することができないが（図 3）、竣工後は小脇壁を有する連子窓になっている。修理前の「側廻飛貫、胴貫、足固貫」の各貫成は、「後補ノモノデ各貫穴ヲ検スルニ後世一寸彫括ゲテイルコトガ鑿痕ニヨッテ判然サレテイル. 即チ元ノ貫ハ現頭貫全様ノ七寸デアッタノデアル」とあり、痕跡から 7 寸であった。現状変更では、「側廻飛貫、胴貫、足固貫の各貫成を減じ」ということになったものと考えられる。「縁を舊規に復せん」とあるが、「足固貫ノ成イヲ高メラレタ際ニ下バニ括ゲラレト全ジク全貫ノ下バニ縁ヲ修メラレタモノ」とあり、足固貫の成を高めた際に縁が下げられていたが、現状変更によって足固貫の成を減じたため、縁の位置を高くしたものと考えられる。

「現状変更二」の修理前の側入口は二枚開き戸であり、上下に半長押のような部材が取り付け、軸穴を設けて装置されたと考えられる（図 3）。痕跡調査では藁座附であったことが判明し、竣工後は楣および藁座を設け、扉の形式を棧唐戸に変更している。

「現状変更三」の「内外陣界」の修理前は、大岡論文の「二、國分寺本堂」の写真に掲載され（写真 1）、内外陣境の中央の間は二枚折戸、飛貫上が彫刻欄間であったことがわかる²³⁾。「報告書」の「五. 各部ノ調査」の「内外陣境装置」には、飛貫上の彫刻入欄間の框に「寛文十二年一月吉日此方里物高松大工彦左衛門方里申候」の墨書を発見したとあり、内陣前面五間の間仕切装置は寛文年間のものであることが明らかになった。竣工後は内外陣境の五間の建具が引違格子戸、菱欄間に変更され、上部は真壁に改められている²⁴⁾。

「現状変更四」の「内陣兩側」の各二間の修理前は内法長押、鴨居、敷居を設けた舞良戸引違であり、内法長押の上部は真壁とみられる（図 5）。「報告書」の「五. 各部ノ調査」の「内陣兩入側境」は「内外陣境装置」と同様に「形式. 仕口ヨリ寛文年間ノモノデア

写真 1 讃岐國分寺本堂の昭和修理前の外陣（出典：大岡實，四國路の旅—國分寺本堂一，畫説，第 67 号，1942）

ロウ」とあり、痕跡から寛文年間の改造と判断された。竣工後は内法長押、鴨居ならびに敷居の建具装置を撤去し、楣より下方の柱面には痕跡がなく、各柱間を開放した。楣の上は「柱面及飛貫下端に壁間渡穴を存し」と壁であった痕跡が残され、真壁に復している²⁵⁾。

「現状変更五」の修理前の「後陣」は、左右各一間が板嵌であったとみられる（図 1）。「報告書」の「五. 各部ノ調査」の「後陣境」は、「材質. 手法等ヨリ寛文年間修理ノモノト思ハレ」とある。板嵌は材質とその手法から寛文年間の改造と判断し、撤去することになった。楣の上方の柱面、繫貫、繫虹梁などには壁間渡穴を設けた痕跡があり、竣工後は真壁に改めた。楣より下方の柱面は痕跡がなく、後陣の左右各一間を開放した²⁶⁾。

「現状変更六」の修理前の「内陣後柱」の来迎柱は、柱間が桁行中央柱間より約 2 尺広がっていた（図 1）。竣工後は、来迎柱の柱間が桁行中央柱間と同じ位置に変更されている²⁷⁾。来迎柱の移動については、「来迎柱取付ケノ高欄ハ全形式ノ宝珠柱及全半柱ヲ以テ建テ高欄ヲ補充シ」とあり、須弥壇の高欄を補充していたことになる。

「現状変更七」の外陣天井は、修理前が鏡天井である（図 6）。大岡論文の「二、國分寺本堂」の写真をみると（写真 1）、修理前は外陣の鏡天井に天井画が描かれていたことがうかがわれる²⁸⁾。天井組子仕口穴は元にあった痕跡を残し、この痕跡が四方の天井桁に存していることから、竣工後は組入天井に変更された²⁹⁾。

「現状変更八」の内陣天井は修理前が猿頬天井とみられ（図 6）、出組の斗拱と臺股を組み上げて天井を張っている（図 4）。「報告書」の「四. 破損状況」の「天井」には、「内陣ノ部分（桁行三間梁間二間）近世異様ノ斗拱. 臺股ヲ以テ引き上ゲテ棹縁天井ニ改メラレタモノ」と記される。「五. 各部ノ調査」の「内陣天井」には、「元ノ天井廻縁ノ上ニ特殊ノ斗拱ヲ彩色ヲ施シ組上ゲ猿頬天井ヲ設ケテアル彩色ハ寛文年間施サレルモノト所々ニ墨書ガアリ」と記される。寛文年間に内陣天井は、旧天井の廻縁の上の斗拱に彩色を施し、臺股をもって天井を引き上げ、猿頬天井に改造していた。竣工後は、内陣天井が痕跡にもとづいて鏡天井に変更された³⁰⁾。

「現状変更九」の修理前の向拝は、「解体修理前の本堂」の写真から確認できるが³¹⁾、向拝一間、唐破風付であり、向拝の虹梁の上に 3 つの臺股が置かれていた（図 2）。「報告書」の「五. 各部ノ調査」の「向拝部」は、臺股下に「寛文九年酉季八月十四日後藤氏盛継形見敬白」の墨書を発見したとある。向拝の全体の形式は同時期のものであることを明らかにし、寛文年間に新たに附加したものとみら

れている。向拝の屋根と本堂の取り合いは、谷になって水取りが悪しく、保存上障害があるために撤去することになった。修理前は木階段が4段であったが(図2)、向拝の撤去後は木階段が腐朽し易いことにより、石段に改めている。

(3) 建築形式の類例調査

連子窓、側入口の棧唐戸、内陣境格子戸ならびに菱欄間の現状変更では、類例調査を実施していたことが明らかになる(表2)。「報告書」の「七. 修理概要」は連子窓について「國寶石手寺其他當時代ノモノヲ調査研究ノ上製作シ」とあり、石手寺など同時代のものを調査研究して製作した。側入口の棧唐戸、内陣境格子戸および菱欄間は、奈良県の「法隆寺上御堂全聖靈院」「室生寺本堂」「不退寺本堂」、広島県の「浄土寺本堂」「明王院本堂」を比較研究し、製作して装置していた。

「大棟瓦張り」は、「近年ノモノデ不調和デアルカラ熨斗瓦積ニ改メ鬼瓦ノ新補ノモノハ建造物全時代ノモノニ模造スルコト」とある。修理前の屋根の頂部にある大棟は箱棟形瓦張りともみられ(図2)、「近年ノモノデ不調和デアル」「異例ノモノ」という理由で、竣工後は熨斗積みに改めている。鬼瓦については「補修ノ分ハ法隆寺夢殿ノモノヲ模造シ」とあり、その補修は法隆寺夢殿を模造していた。

5. 寛文年間の改造と昭和修理における未変更

(1) 昭和修理にみる寛文年間の改造

讃岐国分寺本堂は屋根勾配、妻飾、内陣天井、須弥壇と厨子、向拝が近世の改造であることが一般に認められてきた。寛文年間の改造については、「報告書」の「三. 沿革」に「向拝ノ附加. 来迎柱. 須弥壇ノ新補. 天井ノ引上げ. 屋蓋. 妻飾ノ改造ニ迄及ンデオリ」とあり、来迎柱も近世の改造であった。昭和修理では向拝、来迎柱、内陣天井が現状変更された。

「報告書」の「四. 破損状況」には小屋組、妻飾、須弥壇と厨子が近世の改造という注目すべき記載があった。「小屋組」は「近世修理ノ際組ミ改メラレタモノ」と記されており、近世に小屋組が改造されていた。「妻飾」は「近世ノ修補ニ成リ」とあり、近世の改作であった。「須弥壇及厨子」は「両者ハ近世ノ製作デアッテ」とあり、近世に須弥壇と厨子を設けたことが認められていた。

(2) 現状変更されなかった箇所

「報告書」の「九. 工事仕様」をみると、「小屋組」は「大體現在ノ構造ヲ踏襲スル」とあり、近世の改造であることが確認され、当初形式と異なることが明らかであっても現状が踏襲されていた。

妻飾は「四. 破損状況」に「破風板. 懸魚. 結綿鬼面. 壁板ハ破損風化減甚シク其ノ他ノ部分腐朽. 破損ハ僅少デアッタ」と記される。「九. 工事仕様」は「大體損傷少ク」とあって、「新補ノモノハ在来形式ニ倣ヒ仕拵ヘ旧材ノ取繕ヒモノト共ニ漸次組立テ或ハ大釘ニテ取ケ」と記される。妻飾は近世の改造であったが、損傷が少なかったことは、復原しなかった一因としてあげられる。妻飾の新補は、在来形式に倣って旧材を取り繕って修理された。

須弥壇と厨子は、「九. 工事仕様」に「殆ド損傷ナキ」とある。破損が認められなかったことが、復原しなかった一因と考えられ、現状の通りになった。本尊の木造千手観音立像(重要文化財)は厨子に安置され、平安後期の作とされる³²⁾。本尊と本堂の建立年代は合致しないが、本尊は現本堂の建立当初に安置されたことが示唆されて

いる³³⁾。厨子は、寛文年間に本尊を安置するために新たに設けたものと考えられている。

6. まとめ

讃岐国分寺本堂は、昭和13年9月の大暴風雨によって屋根の一部が破損した。解体修理は昭和16年2月に起工し、昭和18年8月に竣工していた。昭和修理は部材に刻まれた改造の痕跡を克明に調査し、発見物によって創建以来の沿革、寛文年間における増改築を明らかにした。「報告書」は、昭和修理における方針とその内容をまとめた貴重な資料である。本論では現状変更の要旨と理由を明らかにし、修理前実測図を基礎資料にどのように変更したかを検討した。

第一に、昭和修理では建立年代が判明しなかったが、建築形式から鎌倉後期と考えられ、文化年間の平瓦に刻印された瓦簷文字は、本堂が天正年間の兵火を免れた旧講堂であることを伝えている。

第二に、本堂は天平時代の講堂跡の礎石を再用し、規模を改めて建立された。床下地盤の調査の成果にもとづいて、建立当初は土間に計画されたが、床張りに改められたものと考えられている。

第三に、外部は側廻りの飛貫、胴貫、足固貫の各貫成、連子窓、縁側の高さを現状変更した。現状変更は後世の改変の痕跡を手がかりにして、当初の形式に復原したのと考えられる。

第四に、向拝は墨書が発見され、寛文年間に附加したことが明らかとなった。現状変更では向拝を撤去し、木階段を石段に改めた。

第五に、内部は内外陣境装置に寛文年間の墨書が発見され、飛貫上に欄間彫刻を設けて間仕切装置を改造したことが明らかになった。内陣は寛文年間に斗拱と臺股によって引き上げた猿頬天井を張り、内陣両入側境と後陣境を改造していた。現状変更は内外陣境装置、内陣両入側境、後陣境、来迎柱、外陣天井、内陣天井を後世の改変の痕跡を手がかりに、当初の形式に復原したと考えられる。

第六に、連子窓、側入口の棧唐戸、内外陣境の格子戸と菱欄間の現状変更には、類例調査が実施されていた。

第七に、近世に改造された妻飾は、旧材を取り繕って修理された。須弥壇と厨子は損傷がみられず、近世の新設であっても現状のままとなった。国宝保存法時代の修理は、創建時の屋根の形態の復原を重視していた³⁴⁾。小屋組は近世の改造が明らかになっても現状が踏襲され、屋根勾配は建立当初と異なるものとなった。

以上、讃岐国分寺本堂は建立年代が鎌倉後期ではあるが、昭和修理において解体修理が起工し、現状変更が許可されていた。本論では昭和修理に関する資料を検討し、遺構は現状変更によって建立当初の形式に復原された箇所があるが、後世の改造が判明しながらも現状の通りとなった箇所を明らかにすることができた。最後に建立当初の建築形式の解明については、今後の課題としたい。

謝 辞

讃岐国分寺本堂の資料所在は、高松市教育委員会文化財課藤井雄三副部長にご教示をうけ、高松市歴史資料館の堀純子氏のご協力をえました。大岡實博士文庫の閲覧は、安田徹也氏に便宜をはかっていただいた。ここに記して深謝いたします。

本研究は、平成21～23年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「四国における戦前期の古社寺建造物の修理に関する研究」(研究代表者:三浦要一、課題番号:21560669)の成果の一部である。

注

- 1) 文化庁文化財保護部史跡研究会監修：図説 日本の史跡 第5巻 古代2，同朋舎，pp.244～245，1991
- 2) 文化財建造物保存技術協会編集：国宝・重要文化財建造物官報告示，p.11，1996
- 3) 文化財建造物保存技術協会編集：資料旧国宝建造物指定説明，p.55，1982
- 4) 文化庁編集：国宝・重要文化財建造物目録，第一法規，p.543，2000
- 5) 文化庁編集：建造物要覧 昭和60年度，p.57，1985
- 6) 文化庁監修：国宝・重要文化財大全 11 建造物（上巻），毎日新聞社，p.98，1998
- 7) 山岸常人：古代寺院の再興と律衆 讃岐国分寺本堂，朝日百科 国宝と歴史の旅 下，朝日新聞社，pp.46～52，2001
- 8) 鈴木嘉吉：四国の古建築，佛教藝術，53号，pp.18～19，1964
- 9) 前掲7)
- 10) 青柳憲昌：国宝保存法時代の建造物修理に示された保存の概念，日本建築学会計画系論文集，第620号，pp.235～242，2007.10
- 11) 浅野 清：古代建築の修理改造のあり方に関する歴史的考察，樞原考古学研究所論集 第五，吉川弘文館，pp.327～340，1979。岡田英男：建造物修理初期の批判と現在の施工上の問題点，日本建築の構造と技法〔下〕，思文閣出版，pp.143～155，2005
- 12) 三浦要一：豊楽寺薬師堂の明治修理，日本建築学会計画系論文集，第617号，pp.127～134，2007.7；竹林寺本堂の建立年代と明治移築，2011年度日本建築学会関東支部研究報告集 審査付き研究報告集，7，pp.161～164，2012
- 13) 瀬戸内海歴史民俗資料館蔵（歴史収蔵資料目録十三 松浦正文庫目録，p.38，1989）。『さぬき国分寺町誌』（国分寺町誌編纂委員会編集，p.280，2005）がすでに紹介されている。
- 14) 現在，讃岐国分寺本堂は内部の遺構調査が許可されていないが，以下の報告をおこなっている。三浦要一：讃岐国分寺本堂の昭和修理（Ⅰ）（Ⅱ），2009年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ，pp.537～544，2010
- 15) 川崎市立日本民家園蔵
- 16) 前掲13)，pp.761～762
- 17) 前掲7)
- 18) 忍冬会：清交，第19号，pp.29～38，1942
- 19) 奈良文化財研究所編集：国宝・重要文化財建造物保存図目録，p.112，2003
- 20) 文化庁編集：国宝・重要文化財（建造物）実測図集（香川県 その2），pp.151～157，1973
- 21) 奈良文化財研究所編集：国宝・重要文化財建造物摺拓本等目録・下，pp.232～233，2001
- 22) 奈良文化財研究所編集：国宝・重要文化財建造物写真乾板目録 V，pp.234～236，2012
- 23) 大岡 實：四國路の旅—國分寺本堂—，畫説，第67号，pp.501～509，東京美術研究所，1942
- 24) 前掲7)
- 25) 前掲7)
- 26) 前掲6)，p.669。前掲7)
- 27) 前掲6)，p.669。前掲7)
- 28) 前掲23)
- 29) 前掲7)
- 30) 前掲7)
- 31) 前掲13)，p.760
- 32) 前掲13)，pp.741～742
- 33) 前掲23)
- 34) 前掲10)

（2012年6月10日原稿受理，2012年8月3日採用決定）